

第一次指導的 (一よむ〜四かく) 第二次指導的 (五よむ〜七よむ)

(児童はノートに鉛筆を一本はさみ、学習準備を整える)

○ それでは勉強を始めたと思います。朝なので、おはようございますと挨拶をしましょう。おはようございます。

おはようございます。

○ すてきない声で、とっても嬉しくなりました。

一 よむ

○ 今日、「ふしぎ」という詩を一時間一緒に勉強していきましょう。

昨日おうちで、この「ふしぎ」という詩を読んだよ、という人いますか。

(ほとんど多数挙手)

○ ああすごい、ああ素晴らしい。はい、降ろしてみて。みんな読んでくれて、今日はとっても良い勉強になりそうで嬉しく思います。

一緒にがんばりましょう。

○ それでは、みんなで一緒に読んでみたいと思います。まずは、教科書の十二ページ、「ふしぎ」というところです。今日はたくさん人の、声をできるだけ聞きたいので、読む順番を決めたいと思います。さつき、ノートにはさんだ鉛筆を出してください。数字の1 2 3 4という番号をこれから言うところに付けてくださいね。

1 十二ページ 初め わたしはふしぎで

2 十二ページ 六行目 わたしはふしぎで

3 十三ページ 一行目 わたしはふしぎで

4 十三ページ 四行目 わたしはふしぎで

○ 鉛筆をまたノートにもどしてください。仕事はやいので感心しました。

○ 読む順番決まっていますか。決まっていますか。こちらから、一番後ろのあなたから、1、2、3、4、そして最後の人は全部を、

1から4までを一人で長いですけど読んでください。読む人は立って、本を持って、大きな声でゆっくり、それからはっきり読んでください。できれば後ろの先生方にも聞こえるように読んでもらえるとうれしいです。二番目、三番目、四番目の人、前の人が終わるなあとと思ったら、すうっと横に立って、読む準備をして待っていてください。短い所なのでよろしく願います。聞く人、もうすでに上手に本を持って待っていてくれる人がいるんですが、しっかりと本を持って、どんな不思議があるかなあと考えながら聞いてください。それでは最初の人、よろしく願います。題からお願いします。

(順繰り読み 五人)

○ 静かに本を置いてください。今、五人の人に読んでもらいました。最初に大きな声でと言ったら、みんなしっかり大きな声で読んでくれたので、詩の中身がとてよく分かったかなと思います。

二 とく

○ それではお勉強していきましょう。

(板書 ふしぎ)

○ 「ふしぎ」という詩なんですけれども、みんな、「ふしぎ」ってどういうことか分かりますか。不思議、分かった人は手を挙げてください。別の言葉で言ってみてください。

変だなあと思ったことです。

○ 変だなあと。他の言葉もあるかなあ。

何でだろう。

○ 何でだろう。変だなあとか、何でだろうとか、よく考えてもなんだか分からないなあというのが不思議っていうことだと思っただけ、みんなが、あ、あれ、不思議だなあと思ったことがこれまでにありますか。どんなことがありましたか。言える人、はい。

どうして、うちではこの前、お祖父ちゃんが畑を耕していたけど、どうして畑を耕さないといけないのかな。

○ なるほどね。どうして畑を耕さないといけないのかな。一回作物がなったらそのまましとけばいいと。でも一生懸命耕すのよね。それを不思議だなあと。他にこんなこと不思議だなあと思ったことがありますか。

同じ学年なのに、力とか背とか、なぜ違うのか。

○ はあ、本当だ。同じ学年なのに、力の大きさとか背の高さや低さとか、かけつことか顔の形とか、みんな違うものね。なぜだと思っただけ。なるほど。それも不思議だねえ。他にもこんなところ不思議だねえって。はい。

動物とか鳴き声があるのに、人間はどうして鳴き声がないのか不思議です。

○ なるほどね。人間は鳴き声がない。それも不思議だね、他の動物は鳴き声がありますよね。はい。

○ 動物はしっぽがあるけど、なんで人間にはしっぽがないのか。なるほど、動物はしっぽがあるけど、人間はしっぽがないよね。言われてみるとそうだね。なんか出てくるね、不思議っていっぱい

ね。

○ みんなもそういう不思議をいっぱい持っているんですけども、この「ふしぎ」という詩は、何を見て不思議だなあと思ったのでしょうか。はい。

この詩を作った金子みすゞさんは、自分の思ったことを文章にして、わたしは不思議でたまらない。黒い雲からふる雨が、銀に光っていることが、というのは、黒い雲からどうして銀色の雨が降ってくるから不思議だからということ…。

○ そのうちから、雲を見て不思議と思っただけかなあ、雨を見て不思議と思っただけかな。

黒い雲…。

○ 雲かなあ。雨かなあ。

どっちもだと思います。

○ どっちも、なるほど。

雨だと思えます。

○ 雨だと思っ、なるほど。他の人はどうですか。

○ 雲があつて雨があるんだけど、先生もそのうちの雨かなあと思っただけです。では、あと二つ見て、不思議だなあと思っただけかなあ、あるんですけども、一言で言うと、何を見て不思議だと思っただけかな。一つ目は、雨。二つ目は。

青い桑の葉。

○ 青い桑の葉っぱを見て、不思議だなあと思っただけかな。桑の葉を何かしている何かを見て不思議だなあと思っただけかな。

青い桑の葉を食べている蚕を見て。

○ 蚕ね。青い桑の葉食べている蚕を見てそう思っただけかな、きつと

ね。もう一つあるでしょう。いいよ、間違えても。

夕顔だと思えます。

○ 夕顔。夕顔というお花なんだけれども知っている？

知っている。(二、三人がつぶやく。)

○ 夕顔のことでちよつとお話できるよという人。何かに似ているんだけど。はい。

朝顔に似ている花です。

○ 朝顔に似ているよね、形としては。はい。

夕顔は、夕方に咲く花です。

○ そうなのです。朝顔は朝、お日様が出てくると花が咲くのだけれども、夕顔は夕方になると、夕方になりましたよと感じて、ヒューと(両手を重ね、花の開く様子を見せながら)と花が咲くのです。これが瓢箪になったり、みんなの好きな干瓢になったり、その干瓢の元になるお花です。

○ それでは、蚕を見ることがありますか。

前、飼っていた。

○ 前、飼っていた？ 蚕はどんな？

さなぎで…。

○ さなぎで、蚕というのは何をするのですか。

蛾になる。

○ そう蛾になるのね。蝶の仲間です。三年生の時に青虫の勉強をした？

卵が黒い胡麻粒みたい。(つぶやく)

○ そうそう、卵が黒い胡麻粒みたいに小さな物ですが、そこから孵って小さい幼虫から、大きくなるとこのぐらいかな、もう少し大き

くなるのもあるそうです。(指で四、五センチの大きさを示しながら)これぐらいの蚕、幼虫になって、最後白い糸を吐いて、繭を作つて、蛾になるのだけれど。その前は絹糸と違って、大人にはとても貴重で喜ぶ糸になるそうです。こういう蚕は、青い桑の葉を食べるのでね。

○ この詩の蚕、夕顔、雨。みんなは、それを見て不思議だなと思つたことはありませんか

全部不思議だなと思つました。

○ 不思議だなと思つました。なるほどねえ。みんな自然の物で不思議だなと思つました。

○ この詩、こういう事を不思議だなと思つている私という子、いくつぐらいかな。みんなより大きいかな。ずっと小さいかな。私という子は。

○ 小さいと思う人。

(挙手 一人)

○ 大きいと思う人。

(挙手 多数)

○ 大きい人。いくつぐらいの子とも思いますが。

○ みんなは雨を見て、お空から降る雨を見て不思議だなと思う？

(数人が首を横に振る。)

○ 思わないよね。この詩を、こんなふうに不思議だなと思つていくつぐらいだと思いますか。

六才、七才ぐらい。

○ みんなよりもっと小さい時。いろんなこと不思議だな。ねえねえねえつて、なんで？なんで？つて思つたことない？ ねえ。私はこ

の詩は、もう少し小さいかなと思っただけです。保育園とか幼稚園ぐらいの子かなあというふうに思いました。

○ お空が真っ黒になって雨が降ってきて、なんでこういう雨が降ってくるのかなって、不思議だな、とか。青い桑の葉をモリモリモリ食べている蚕がどうして白いのかなあ、不思議だなあとか。夕方になると、さつあと開く夕顔、不思議だなあ。なんでなんだろう。こんな不思議がいっぱいの詩です。

〈手引き〉

○ さあ、今日は、この不思議なところを書いてお勉強したいと思います。

○ ノートを開けてください。ここに四つの連がありますが、不思議なことというので、「わたしはふしぎでたまらない」の一行目は書かないでいいです。二行目、三行目を四連とも書いていってください。必ず一番上から始まっているところは一番上から、黒い雲、銀、青、かいこは一番上に書いてください。それから、一連と二連の間は一行、連を開けて書くようにしてください。いいですか。では始めましょう。

### 三よむ 四かく

黒い雲からふる雨が、  
銀にひかっていることが。

青いくわの葉たべている、  
かいこが白くなることが。

たれもいじらぬ夕顔が、  
ひとりでばらりと開くのが。  
たれにきいてもわらってて、  
あたりまえだ、ということが。

(一人一人のノートを見ながら机間指導)

○ 一生懸命書いたんだというのがよく分かる字でした。昨日の作文の時間もそうでしたが、一生懸命お勉強する人たちだなあと思って感心しました。

### 五よむ

○ それでは今度は黒板で勉強するので、鉛筆をノートに挟んで、本もノートも閉じて机の中にしてしまってください。

○ お仕事早く終わっていきます。それでは読みたいと思います。今、皆さんにはここ(板書を指して)を書いてもらいましたが、本当はこの前に、「わたしはふしぎでたまらない」という文がありましたね。そこも一緒に読んでもらいたいと思います。どこにも必ず付いてくるので一番最初には「わたしはふしぎでたまらない」を入れてください。

(板書 わ)

視黙読 一回

六  
とく

- この中で分からない言葉はありませんか。特にないですか。
- いじらぬ。だれもいじらぬ、分かりますか。

(板書 いじらぬ に傍点 赤チヨーク)

- 誰もいじらない。誰もいじらない。
- いじらないから、いじらないってことね。そう、誰もさわってないよ、いじってないよということ。もう一つ。あたりまえって、分かる？

(板書 あたりまえ に傍点 赤チヨーク)

- 絶対そうだよ。絶対そうだよ。それから。

常識だよ。常識だよ。なるほどね。そういう言い方もあるね。じゃ、他は、大丈夫ですか。

- 二つに分けます。

(板書 連の上に大きい括弧を二つ 赤チヨーク)

- こちら側(括弧 右の方)が見たこととそうでない物に分かれています。(板書 見 赤チヨーク)
- 見た物がこの中に三つあるけれども、さっきも言ったね。一言でいうと、見たこと三つ。

雨。(板書 雨 に文字囲い)

- ここは。(板書の二連を指して)

蚕です。(板書 かいこ に文字囲い)

夕顔です。(板書 夕顔 に文字囲い)

- 夕顔なんですが、夕顔はどんなことが不思議なんですか。私という子にとって。夕顔のどこが不思議なんですか。

ひとりではばらりと開くのが不思議。

- ひとりではばらり。もう一つなんだっけ、ひとりで…。

いじらぬのに。(いじらぬ に傍点 赤チヨーク)

- 誰もいじってないのに、ひとりでに。普通みんな、たとえば、なんか袋を開ける時って、こうジーツと見ていて開く？

開かない。(笑いながら口々に)

- 開かないよね。なんか手品みたいだね。誰もさわってないのに、時間が来るとスーッと(手で花の開く動作)開く。不思議だなんて思ったの。でも、この子どうだったら当たり前なの。その夕顔がどうだったら当たり前なの。

誰かがさわったり、つぼみをさわったりしたら開いたりして、さわらなかつたら開かない。

- うん、こうやって一人でさわって開けたりとか、もしかしたら、「スイッチ、ポン。」「ピーン。」なんていうのがあったら、当たり前なのかもしれないね。

では、こっちの雨。この子にとって、どこが不思議なの。

- 銀に光っている。(板書 銀 に傍線 赤チヨーク)
- どこから降ってくる雨が銀に光っているから不思議なの。

黒い雲から降ってくる雨です。(板書 黒 に傍線)

○ 黒い雲から降ってくるのに銀に光っている。ピカッて。キラキラキラキラ光っているように見えたんだろね。じゃあ、そんな不思議なんだけれども、この子にとったら、どうだったらこの雨が不思議じゃない。当たり前になる。

スイッチを押ししたりしたら出てくる。

○ なるほど、あの雨が、「スイッチ、ポン。」って押ししたら雨が降ってくる。不思議じゃないと思う、なるほどね。

黒い雲から降ってるから、雨も黒い雨なんだと。

○ 黒い雲だから、黒い雨だと不思議でない、当たり前だと思う。どうする。黒い雲から黒い雨が降ってきて、ここに黒い雨がこうやって付いたら（自分の腕や胸の辺りを雨が付く動作）。どうする。

そりやすごい。（二、三人、大きなつぶやきの声）

○ ねえ、洋服とか黒くなっちゃったら、うんって（首を横に傾げて）思うね。もう一つ色の不思議。こっち（二連）、この蚕。どうしてこの子、不思議だと思ったのかな。

青い葉を食べているのに白くなるから。

（板書 青 白 に傍線 赤チヨーク）

○ 青い桑の葉を食べているのに蚕というのは真っ白になるんだよ、蚕。この私が見ている蚕は、青い葉っぱをムシヤムシヤムシヤってすごい勢いで食べるんだよ。それなのに蚕は白い。では、この子にとつてどうだったらこの蚕は不思議でなくて、当たり前なの。

青い桑の葉を食べているから、蚕が青くなったら不思議じゃないと思います。

○ 青い葉っぱを食べるんだから、青くなったらいいんじゃないかと。みんなも葉っぱをさわったときに手が染まったりしませんか。

汁さわると。

○ 汁をさわると、ちよつと青くなったりするでしょう。でも、こんなに小さな虫（手で二、三cmぐらいの長さを示して）が、こんなに大きな葉っぱ（掌いっぱい広げて）を、青々とした葉っぱをムシヤムシヤ食べているんだよ。それがこの子にとつてはとっても不思議だなあ。そんないろんな不思議を見つけたので、私はそこで何をしましたか。

みんなに聞いてみました。

（板書 きいて に傍線 赤チヨーク）

○ 聞いてみました。誰に。誰に聞いたのですか。小さい子が不思議だなあ、不思議だなあと思った時に聞く人って。

いろんな人に聞いても、みんな笑っていて。

○ いろんな人に聞いてみて。いろんな人って具体的にいうと。みんなが不思議だなあって思った時に聞く人って。

お母さん、お父さん。

家族の中。

○ 家族の中？

お母さんとか。家族全員。

学校の先生とか。

○ 学校の先生、なるほど。先生聞いてくださいって。

友達に。

○ 友達ね。それから。

僕も友達です。

親戚とか家族の大人です。

○ 親戚とか家族の大人、お父さんやお母さん、親戚の人や大人に聞

く人や友達に聞く人もいるね。この子もお父さんやお母さんや幼稚園の先生に聞くかもしれないね。では、その時の聞かれた人の返事。当たり前だつて。

(あたりまえに傍線。赤チヨーク)

○ 当たり前だよ。これ(自分の顔を指されて)表情は。

笑つて。 (板書 わらつてに傍線 赤チヨーク)

○ 笑つて、笑いながら。小さな子に聞かれて、そうかあ、そんなことを不思議に思ったの、あなたもお姉ちゃんになったねえつて。そんなこと当たり前のことだよ、と大人の人たちが答えてくれたんじゃないかと思うのですが。この私にとつてこの返事でこつち(右側の括弧)の不思議がそうか、そういうことだったのか、へえ、分かったかった!となりましたか。

ならなかった。(口々に)

○ ならなかったね。やっぱり不思議だな、どうしてなんだろう、というのが残っているよ、ということが一言あるよ。ここ(板書)には出てないのですが。

不思議でたまらなかった。

○ 不思議でたまらない。やっぱり不思議で、不思議でたまらない。考えても考えても不思議でたまらない。でも、大人たちは、聞いても当たり前のことなんだよ、と。聞かれた大人は、お父さんやお母さんや幼稚園の先生かな。そんなことを不思議に思えるほどあなたは大きくなったのね、つて、そんなことを教えてくれたのかなと思えました。

○ それでは、最後読んで終わりにしたいと思います。さすがです、二回目になると、腰がぐつと立ちました。素晴らしい。

(指音読 一回目)

○ 消してもいいですか。(行の初めの文字のみ残して)

黒い

銀

青い

かいこ

たれも

ひとり

たれ

あたりまえだ

(視音読 二回目)

○ 全部消しても?

大丈夫。

(視音読 三回目 全文を消して)

○ すばらしいです。最後に一人で挑戦してみたいという人はいますか。

(挙手七人)

(七人全員が堂々と暗唱して読み上げる。)

○ 一時間でしたが、とつても良い勉強をさせてもらって嬉しかったです。またこれから夏休み、元気に遊んで勉強して過ごしてください。それでは終わりにします。ありがとうございました。

(指導者 礼)

ありがとうございました。

(礼)

〈板書事項〉

ふしぎ

見

わ

黒い雲からふる雨が、

銀にひかっていることが。

青いくわの葉たべている、

かいこが白くなることが。

たれもいじらぬ夕顔が、

ひとりではらりと開くのが。

たれにきいてもわらって、

あたりまえだ、ということが。

(注 傍点も赤チヨークです)